

社会的な評価と個人的な評価を分離する場合の あいまいな語の有効性について

西岡 美和

現在の自己をどのように認知し評価するのは、個人が現在の自己を個人の人生や環境の中でどこに位置付けるかが影響する。従来、自己評価を測定するときには、社会的望ましさを観点から見て肯定的あるいは否定的と判断された複数の評価項目から成る尺度を準備して、その個々の項目が自己に当てはまる程度を被験者に評定させていた（遠藤，1991；Pelham & Swann, 1989）。評定項目の社会的な評価がそのまま被験者個人の評価になると仮定し、主に社会的望ましさによる社会的な評価を項目の評価として用いられてきた。しかし、個人の評価が個人を取り巻く社会的・文化的な環境の影響を強く受けているのは確かだとしても、社会的な評価と個人の評価の間にはズレがあるはずで、これらを同一視できない。そこで本研究では個人の評価と社会的な評価の間に存在するズレを取り上げ、ズレを生じさせる要因について検討する。

井上（1992）は20答法での記述内容ひとつひとつについて、記述者自身が満足度を評価したものと、複数の判定者が客観的に評価したものを比較し、両者の間にズレがあることを示した。特に、記述者自身の評価では、自尊感情の高い者が低い者に比べて肯定的に評価したカテゴリーとして、客観的評価で肯定否定の評価が困難であった「学生としての役割」が加わったとしている。調査対象者が大学生であることを考えれば、このカテゴリーで記述者の個人の評価と判定者の客観的評価が一致していないことは、重大なズレであると考えられる。

また伊藤（1996, 2000）は、社会的な評価が異なる3種類の特性語（肯定語、あいまい語、否定語）について、①それらが自己に当てはまるかどうか、また、②それら自己の特徴をどの程度肯定的だと判断するか、を自尊感情と関係付けながら検討した。そこで、自己に当てはまると答えた項目については、肯定的、あいまい、否定的な特性いずれであっても、自尊感情の高い者の方が低い者よりも肯定的に捉えていることが明らかにされた。このことは、同じような自己の特

徴であっても、その評価に個人差があることを意味しており、そのような個人の評価と社会的な評価とを混同すれば、個人の自己評価を正確には測定できないことを示している。

社会的な評価による自己評価の測定への影響は、社会的な評価が明確な語を用いて測定を行ったときに顕著であるだろう。桑原（1986）は、対立する人格特徴を対にして、それぞれがどの程度自己に当てはまるか独立に評定させることにより、人格の二面性を測定した。その際、人格特徴の各対について社会的に望ましい対と望ましくない対の両方を作成することにより、質問項目の評価が自己評定に与える影響についても検討している。同じような人格特徴を表す項目について比較してみたところ、社会的望ましさが異なると相関が低いものが見られた。このことは、同じような人格特徴であっても、質問項目の社会的望ましさが異なれば、自己評定も変わってくることを示している。

このような質問項目の社会的な評価による自己評定への影響を軽減させる方法の1つとして、社会的な評価が不明確なあいまいな語を質問項目として用いることが考えられる。青木（1974）は、同一の特徴が「望ましい」方にも「望ましくない」方にも言い換えられることを指摘し、なおかつ、望ましさを程度が比較的中程度の用語の方が、高いあるいは低い用語よりも、望ましい方向にも望ましくない方向にも言い換えやすいことを明らかにしている。つまり、個人の同じ特徴は肯定的にも否定的にも捉えられ、社会的な評価が不明確な語で表現されると社会的な評価の影響を受けにくく、肯定的にも否定的にも受け取れることがわかる。

これまで社会的な評価が不明確な個人の特徴は、その評価を用いて自己評価を測定できないことから取り上げられることが少なかった。しかし、その社会的な評価の影響が少ないという特徴は自己の側面に対する個人の評価の影響を測定するときには有利に働くだろう。

本研究では社会的な評価が異なる(肯定的、あいまい、否定的)特性を用いて、その特性が自己のものであるときと他者のものであるときで、特性に対する感情や評価に差異が生じるのかについて自尊感情との関係を用いて検討してみる。

当然のことながら、自己特性、他者特性のいずれに対しても、一般的な社会的な評価が大きな影響力を持つだろう。しかし、自己の特性については、井上や伊藤が指摘しているように、自尊感情が影響するはずであり、自尊感情が高いほど全体として自己に対して肯定的になると考えられる。また、社会的な評価が明確な肯定的あるいは否定的な特性を評価するときには、社会的な評価の影響が顕著で、自尊感情の影響ははっきりとあらわれないが、社会的な評価が不明確な特性を評価するときには、自尊感情の影響が認められ、自尊感情の高い者ほど肯定的な感情や評価を抱くのではないかと予想できる。つまり、社会的な評価が不明確な特性では自尊感情の影響により、自己の特性に対する感情や評価に個人差が生じるが、社会的な評価が明確な特性や他者の特性では自尊感情の影響が少ないと考えられる。

方 法

調査対象者

大学生 119 名に実施し、記述に空欄があった 10 名を分析から除いた。最終的に調査対象者は、男子 46 名、女子 63 名の合計 109 名で、平均年齢 19.9 歳であった。

質問紙

自尊感情尺度; Rosenberg (1965) の self-esteem scale (星野 (1970) が邦訳したもの) を用い、4 件法で評定させた。

自由記述

特性語は、伊藤 (1996) が桑原 (1986) をもとにして特性語に対する社会的な望ましさを測定した語から肯定語、否定語、あいまい語の 3 種類を選出した (使用した特性語については表 2 を参照)。望ましさの評定をもとに、肯定語として望ましさの評定値が最も高かった 3 語、否定語として最も低かった 3 語、あいまい語として評定値が平均値に近く、分布が評定の中心を中心に山型であった 16 語を選択した。これら 22 語の特性語を用いて、その特性が他者のものである他者特性と自己のものである自己特性を測定した。質問紙は特性語をランダムに配列した 3 種類用意した。他者

特性の質問紙には、「以下に記述しているような他者について、あなたが思うこと、感じることをできるだけ具体的に、簡潔に答えてください。」という教示文の後、「私は〇〇な人を_____」(〇〇には各特性語が入る) という文章を 22 文並べた。また、教示の時に口頭で、「ある特定の個人ではなく、そのような特徴を持っている人一般を対象にして考えるように」と伝えた。自己特性の質問紙には、「以下に記述しているような自己の側面について、あなたが思うこと、感じることをできるだけ具体的に、簡潔に答えてください。」という教示文の後、「私は自分の〇〇なところを_____」(〇〇には各特性語が入る) という文章を 22 文並べた。特性語は配列が異なるが他者特性と自己特性に同じものを用いた。

手続き

自尊感情尺度を実施して、次に自由記述を行った。自由記述は両面に印刷し、他者特性 22 文を完成してから、自己特性を記述するように求めた。助詞については自由に変えても良いとした。

結果の処理：自尊感情尺度

「とても当てはまる」4 点～「全く当てはまらない」1 点まで得点化し、10 項目の合計得点を自尊感情得点とした (以下、SE 得点とする)。

自由記述による感情反応の分類：分類基準の設定

自由記述の内容を、特性に対する肯定的な感情や評価を抱いている記述か、否定的な感情や評価を抱いている記述か、その他の記述かの 3 カテゴリーに分類した。カテゴリーの定義を決定するために、まず肯定語と否定語に対する記述について筆者を含む 4 人の心理学専攻の大学院生で分類した。両特性語ともに、感情 (好き、嫌い)、評価 (良い、悪い)、行動 (目指す、避ける)、欲求 (増やしたい、減らしたい)、4 種類が混合した記述、言い換え、感情が読み取れない記述 (ある、ない) の 7 種の記述に分類できた。これらの分類から、肯定的な感情や評価を抱いている記述 (以下、肯定的記述とする) とは、「特性語が示す自己あるいは他者に特徴的な側面へ近づきたい、側面の増加、肯定的な感情に関する記述。現在の状態で進む、維持する、その側面がいい感じだと感じているような記述。」とした。また、否定的な感情や評価を抱いている記述 (以下、否定的記述とする) とは、「特性語が示す自己あるいは他者に特徴的な側面からの回避、側面の減少、否定的な感情に関する記述。違った状態への変更や、現在の状態からの回避、その側面を嫌がっていると感じているような記述。」とした。どちら

にも分類できない記述や両方に分類できる記述はその他の記述（以下、その他記述とする）とした。

分類方法

分類者は、心理学専攻の大学生 13 名及び大学院生 11 名、筆者の合計 25 名であり、各記述に対して 3 名が分類を行った。

分類カテゴリー

肯定的記述、否定的記述、その他の記述の 3 つであった。

分類の手続き

分類者に分類基準の設定で示した 3 つのカテゴリーの定義を説明して、記述内容を分類させた。その際、他者特性については、個人自身に対する感情や評価、特性に対する社会的な評価ではなく、他者が持つ特性に対する個人的な感情を優先して読み取って分類することを強調した。これは、分類基準の設定の時に「尊敬するが、毎日顔をあわせたいとは思わない」など 1 つの記述の中に特性に対する評価と感情の両方が含まれているものや、「うらやましい」のように他者自身に対する感情は否定的だが、特性を肯定的に捉えていると考えられる記述があったためである。

また、同じ記述でも特性語によって分類が異なると考えられたので、分類では記述の対象となった特性語を明示した。例えば、「強くしたい」という記述が「デリケートな」と「クールな」の両方の特性語にあり、「クールな」のときには当該の側面を伸ばしたいと思っていると読み取れるため肯定的な感情を反映していると分類できる。しかし、「デリケートな」のときには、当該の側面を「弱い」と考えて「強くした

い」と記述したとも考えられるので、肯定的あるいは否定的どちらの感情を反映しているのか分類し難い。また、特性語と記述文と一緒に呈示することで、あいまい語の分類を肯定語あるいは否定語の分類と一緒に進めるとあいまい語の分類に歪みが生じる可能性がある。肯定語と否定語の分類者とあいまい語の分類者は別にし、各分類者は割り当てられた特性語については全調査対象者の記述を分類した。筆者以外の各分類者は特性語 2～6 語について、筆者は全特性語について分類を行った。

結果と考察

感情記述分類の一致率

分類者に記述の対象となった特性語を明示したため、特性語と記述の両方を考慮して分類し、記述のみを対象とした分類ができなかった可能性がある。しかし、分類が 3 カテゴリーであることや同一の特性語に対して 3 名の分類者を割り当てたことを考慮すれば、3 名の分類者の一致率が高ければ記述に反映された感情や評価を客観的に分類できたとできるだろう。そこで、分類者間の一致率を求めて、分類の一貫性と分類の問題点について検討する。

3 名の分類者の内で 2 名の一致率は、他者特性では 90.7～99.2% で平均 96.2% であった。自己特性では、94.1～100% で平均 97.5% であり、全体で一致率の平均は 96.8% であった（表 1）。分類の基準の一貫性については、2 名の分類者間での一致率が全ての語で 90% 以上であり、3 名の分類者での一致率では他者特性

表 1 各特性語別の一致率の平均値、最大値、最小値

		全 体	否定語	肯定語	あいまい語	
自己特性	2 名一致	平 均	97.5	98.9	97.7	97.1
		最 大 値	100.0	99.1	98.3	100.0
		最 小 値	94.1	98.3	97.4	94.1
	3 名一致	平 均	82.8	87.2	85.7	81.4
		最 大 値	93.2	90.6	93.2	89.0
		最 小 値	72.9	82.1	77.8	72.9
他者特性	2 名一致	平 均	96.2	97.5	96.9	95.9
		最 大 値	99.2	98.3	99.2	99.2
		最 小 値	90.7	96.6	93.2	90.7
	3 名一致	平 均	79.7	89.3	89.5	76.0
		最 大 値	93.2	93.2	93.2	87.3
		最 小 値	59.7	85.7	83.1	59.7

の「デリケートな」と「孤独を好む」の2語を除いて70%以上であった。

3名の分類者間での一致率を見てみると、自己特性で一致率が80%未満であった語は、「陽気な」、「それとなく言う」、「クールな」、「理論的な」、「同調的な」、「厳格な」、「デリケートな」、「現実離れた」の8語であった。この中で「陽気な」のみが肯定語で、残りはあいまい語であった。他者特性では、「孤独を好む」、「古風な」、「分析的な」、「理論的な」、「同調的な」、「厳格な」、「デリケートな」、「現実離れた」、「おしゃべりな」、「細心な」の10語で、全てあいまい語であった。

あいまい語の3名の一致率が低かったことには、分類方法の問題と記述内容の特性の2点が関係しているだろう。分類方法の問題としては、前述したように、記述内容を分類する時に特性語が分類の手がかりとして使用されていたと考えられる。記述内容だけでは特性に対する感情を分類することができないため、特性語が肯定語であれば肯定的な記述として、否定語であれば否定的な記述として分類した。しかし、あいまい語では特性語の評価を手がかりとして使えず、一致率が低くなった。このことから、分類は調査対象者の記述内容だけでなく、特性語の社会的な評価を手がかりに行われたと考えられる。

あいまい語の記述内容の特性としては、分類者2名

での一致率が100%であったにもかかわらず、3名の一致率が低い語があった（「同調的な」、「あきらめのよい」）。例えば、「同調的な」は2名の一致率が100%なのに対して、3名の一致率が74.3%と低い。分類内容を詳しく見てみると、肯定的記述とその他記述もしくは否定的記述とその他記述に分類が別れていた。分類が一致しなかった全ての記述でも、分類には必ずその他記述が含まれていたことから、記述内容だけでは感情が読み取りにくく、分類者によって判断が分かれたと考えられる。つまり、あいまい語では記述内容に表れる感情や評価が肯定語や否定語に比べて不明確であったのだろう。

これらのことから、分類者は記述内容に表れる感情や評価によって分類を行い、それでは分類し難い記述では特性語の社会的な評価を手がかりに行ったと考えられる。

以後の分析については、2名の分類者間で一致した分類を用いるが、「デリケートな」と「孤独を好む」は他者特性での3名の分類者の一致率が特に低いので分析から除外した。

特性語への感情と評価

特性語の社会的な評価によって特性に対する感情や評価に違いが見られるかについて検討する。各特性語について自己特性と他者特性別に肯定的記述、否定的記述について記述数の合計を求めて χ^2 検定を行った

表2 自己特性と他者特性の各感情記述

特 性 語	自 己 特 性			他 者 特 性			
	肯定的記述	否定的記述		肯定的記述	否定的記述		
否 定 語	なげやり	7	88	P<N	6	99	P<N
	なよなよした	4	87	P<N	4	102	P<N
	しつこい	16	72	P<N	3	101	P<N
肯 定 語	陽気な	82	10	P>N	91	7	P>N
	臨機応変な	95	4	P>N	106	2	P>N
	粘り強い	99	3	P>N	100	5	P>N
あいまい語	何かにこだわる	86	15	P>N	79	26	P>N
	分析的な	60	32	P>N	44	51	
	細心な	60	34	P>N	59	37	P>N
	古風な	57	25	P>N	66	26	P>N
	理論的な	57	34	P>N	44	53	
	厳格な	48	28	P>N	35	66	P<N
	指導的な	48	40		57	38	
	クールな	47	38		54	44	
	あきらめのよい	46	49		47	47	
	現実離れた	41	36		52	40	
	それとなく言う	36	57	P<N	52	46	
	同調的な	36	59	P<N	28	69	P<N
	ぬけている	36	59	P<N	60	30	P>N
おしゃべりな	29	65	P<N	35	57	P<N	

注；不等号は χ^2 検定による有意差を示す。

(表 2)。

肯定語では自己特性と他者特性ともにいずれの語でも肯定的記述が否定的記述よりも有意に多く、否定語では両特性ともに否定的記述が肯定的記述よりも有意に多かった。肯定語や否定語のように社会的な評価が明確な語では、個人の感情や評価が社会的な評価と一致していることを示すものである。

あいまい語では肯定的記述と否定的記述に差が見られない語があった。自己特性では、「指導的な」、「クールな」、「あきらめのよい」、「現実離れした」の4語であった。他者特性では、「分析的な」、「指導的な」、「理論的な」、「クールな」、「あきらめのよい」、「現実離れした」、「それとなく言う」の7語であった。あいまい語は、肯定語や否定語とは違い社会的な評価が不明確なために、特性に対する感情や評価に個人差が出やすいと考えられる。

次に、同じ特性を自己のものとして考えたときと他者のものとして考えたときで、特性の捉え方に違いが見られるかについて検討する。2 (自己特性, 他者特性) × 2 (肯定的記述, 否定的記述) の χ^2 検定の結果、自己特性と他者特性の間で感情記述に差があったのは、「しつこい」($\chi^2(1)=10.85, p<.01$)、「理論的な」($\chi^2(1)=4.69, p<.05$)、「ぬけている」($\chi^2(1)=14.19, p<.01$)、「厳格な」($\chi^2(1)=13.02, p<.01$)、「分析的な」($\chi^2(1)=6.02, p<.05$)の5語であった。

「しつこい」は否定語で、自己特性の方が他者特性よりも肯定的記述が多く、自己の特性として考えたときには肯定的に捉えられていることがわかる。「理論的な」、「分析的な」、「厳格な」でも他者の特性として考えるよりも、自己の特性として考えたときの方が肯定的に捉えやすい。逆に、「ぬけている」では、他者の特性として考えたときの方が肯定的に捉えやすいことがわかった。

自己特性と他者特性の間で感情記述に差が見られた5語の中で4語があいまい語であった。このことから、自己との関わりによる感情記述の差は特性語の社会的評価によって生じ、社会的な評価が不明確な特性では、特性と自己との関わりによって個人的な感情や評価にズレが生じやすいと考えられる。

自己特性と他者特性で感情記述に差が生じた別の考えとして、記述の対象が異なった可能性もある。他者特性には「尊敬する」など必ずしも特性のみに言及した記述とは言えない記述が見られた。他者特性では当該の特性のみではなく、特性によって代表される個人全体に対する感情や評価を記述したのかもしれない。

表 3 自尊感情と各記述得点との相関

	他者特性		自己特性	
	肯定記述得点	否定記述得点	肯定記述得点	否定記述得点
肯定語	-.05	.12	.05	-.00
否定語	-.18	.04	.11	-.15
あいまい語	.04	-.11	.32**	-.27**

** $p<.01$

一方、自己特性では「増やしたい」や「無くしたい」など自己の一部として特性を捉える記述があり、比較的容易に特性のみに対する感情や評価を記述できているようであった。同じ特性であっても感情や評価の対象が異なって、自己の特性と他者の特性で感情記述に差が見られたとも考えられる。

自由記述と自尊感情との関係

あいまい語として社会的な評価が不明確な語を対象とするために、自己特性と他者特性いずれでも肯定的記述と否定的記述の記述数に差があった7語は削除し、肯定語3語、否定語3語、あいまい語7語の計13語を用いて行った。調査対象者ごとに各特性語別に他者特性と自己特性について3カテゴリーに分類された記述内に占める肯定的記述と否定的記述の割合を求めて、角変換を行い、その値を各記述得点とした。自己特性と他者特性について特性語別に各記述得点とSE得点とのピアソンの積率相関係数を求めた(表3)。

相関係数が有意であったのは、あいまい語での自己特性の肯定記述得点($r=.32, p<.01$)と否定記述得点($r=-.27, p<.01$)であった。このことから、自尊感情と関係するのは社会的な評価が不明確でありかつ自己と直接的に関係する特性に抱く感情や評価であることがわかった。

自己特性は自己に直接的に関わる特性である。そのため、自己に対する全体的な評価に伴う肯定的な感情である自尊感情と関係があった。一方、他者特性は自己と間接的に関わる特性であるため、自尊感情との関係が見られなかったのであろう。特性に対する感情や評価は特性語の社会的な評価が不明確であれば、特性と自己との関わりによって変化し、自己の特性では自尊感情と関係して変化すると考えられる。また、肯定語や否定語では、個人の全体的な評価感情である自尊感情との関係が見られなかった。社会的な評価が明確な語では、特性語が持つ社会的な評価の影響が大きく、自尊感情が特性に対する感情や評価に影響しにくい。特性と自己がどのように関わっているかではな

く、特性語の社会的な評価によって特性に対する感情や評価が決定されたと考えられる。

ま と め

社会的な評価が明確な肯定語や否定語では、自己との関わりに関係なく特性に対する感情や評価が決定されていた。しかし、あいまい語では、特性に抱く肯定否定の感情の違いが見られない語が4語、特性が自己と他者いずれに関わるものかによって感情が異なった語が13語あった。特性の社会的な評価が明確であれば、その評価による影響が強く、特性に対する感情や評価に個人差は見られないが、社会的な評価が不明確であれば特性と自己との関わりによって個人差が生じるのだろう。

特性語は複数の言い換えが可能である(青木, 1974)ことから、言い換え方によって微妙に意味が変わり、それに伴って語の社会的な評価も変化する。同じような特性を表現していても、社会的な評価が不明確な表現では、個人の評価が特性に対する感情や評価に影響しやすくなると考えられる。

また、あいまい語は、肯定語や否定語と異なり、自己の特性に対する感情や評価が自尊感情と関係していた。先行研究では自尊感情の高い者は自己認知が肯定的である(遠藤, 1991; Pelham & Swann, 1989)とされている。これまでは、自己認知が肯定的であるかどうかは、質問項目の社会的な評価に依存していた。そのため、自己評価が肯定的であったとしても、それが肯定的な自己評価によるものか、項目の評価に対する反応によるものかを分離することができなかった。しかし、自尊感情が社会的な評価が不明確な自己の特性に対する感情や評価と関係があったことから、自尊感情は自己を特徴付ける側面を肯定的に意味付ける機能を持つと考えられる。

自尊感情のような自己に対する全体的な評価は重要な他者から与えられた評価を取り入れて形成される(Harter, 1999)。特性に対する社会的な評価と個人の評価を分けて考えることは、自己評価の形成過程を検討するために必要である。今後、社会的な評価が不明確なあいまい語のような表現を用いることで、評定に対する社会的望ましさの影響を軽減することができ、自尊感情のような個人の全体的な評価感情と自己の

個々の側面に対する認知との関係を探ることができるかもしれない。

また、社会的な評価が不明確であるということは、評価を意識させにくく、個人が意識できない評価を測定する場合にも有効であるかもしれない。Kitayama & Karasawa (1997)は、ひらがなと数字を用いて日本人の潜在的な自尊感情を測定した。そして、自身の名前や誕生日に関わる語や数字は、関係のない語や数字よりも好まれ、潜在的な自尊感情の高さが見られたとしている。ひらがなや数字は社会的な評価がほとんど存在しない刺激である。一方、本研究で用いたあいまい語は社会的な評価は存在するが、不明確で個人差が生じやすい語である。あいまい語をひらがなや数字と同じように扱うことはできないが、評価を意識させにくいという点では共通している。従って、あいまい語で潜在的な自尊感情を測定することも可能かもしれない。

引用文献

- 青木孝悦 1974 性格表現辞典—一人柄をとらえる記述と言葉—ダイヤモンド社
- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向—自己概念と適応との関連で—上越教育大学研究紀要, 10, 2, 19-36.
- Harter, S. 1999 Contemporary Issues and Historical Perspectives. *The construction of the self: A developmental perspective*, pp. 1-27. New York: The Guilford Press.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(二) 児童心理学, 24, 1445-1477.
- 井上祥治 1992 自己概念 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編)セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版 pp. 48-56.
- 伊藤美和 1996 自尊感情と自己認知の枠組みとの関係 大阪教育大学修士論文(未刊行)。
- 伊藤美和 2000 自尊感情は認知バイアスカ 甲南女子大学大学院心理学年報, 19, 1-9.
- Kitayama, S. & Karasawa, M. 1997 Implicit self-esteem in Japan: Name letters and birthday numbers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 736-742.
- 桑原知子 1986 人格の二面性測定の試み—NEGATIVE語を加えて—教育心理学研究, 3, 31-38.
- Pelham, B. W. & Swann, Jr. W. B. 1989 From self-conceptions to self-worth: On the sources and structure of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 672-680.
- Rosenberg, M. 1965 *Social and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.